

スクリーン音楽の国際労連を出し、世界プロレタリア革命一歩手前に独・共産主義の旗幟、自由民主連合の旗幟を掲げて

今号の内容	反共ナショナルセンター 全民労連結成を粉碎せよ .....P 2~6 ◆三里塚現地闘争に決起せよ .....P 7	1987年 11月1日 第388号 編集発行人 高木一夫 一部 200円		共産主義者同盟（全国委員会） ■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄西2-8-19 明豊ビル401号 大労協内 TEL.(06)371-3706 ○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫 ○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫
-------	---	--	--	---



上▶10月24日には読谷村で天皇の戦争・戦後責任を告発する集会が開かれた  
下▶翌25日には沖縄市でたたかう労働者人民が総結集して集会とデモを展開

# 皇太子訪沖に怒りの決起

## 沖縄

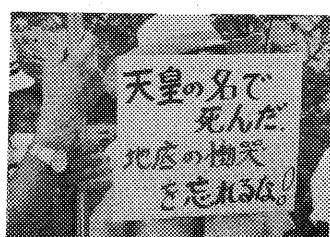
## 左派労働者が闘争を牽引

天皇の「名代」=皇太子アキヒトの訪沖と國体開会式への出席を粉碎すべく、一〇月二三日から二五日の三日間、沖縄現地では労働者人民のたたかいが、六〇〇〇名におよぶ機動隊・私服の弾圧体制をうち破って爆発した。皇太子訪沖と、日の丸・君が代強要の沖縄国体こそ、日帝の沖縄「返還」攻撃の総仕上げをもくろむものであり、「返還」後も持続する沖縄人民の反戦反基地・反天皇の闘争を踏みしかかんとする攻撃である。沖縄の先進的労働者はこの攻撃の性格を鋭く見ぬき、中・高校生を含む日の丸・君が代反対の広範な抵抗闘争としつかりと結びつきながら、ねばり強くたたかいを準備してきた。

一〇月二四日、沖縄の先進的労働者は、社共、県労協の「皇太子来沖、日の丸・チリガマ（壕）の前で、「天皇の戦争・戦後責任を告発するチビチリガマ集会」を五〇〇名以上の結集をもってかちとった。集会は、沖縄戦体験に立脚した反戦平和闘争を防衛・発展させていく立場を明らかにして、日の丸・君が代国体へのたたかいを呼びかけるものであった。日帝は、「読谷村では日の丸斎唱、君が代掲揚がおこなわれないので、ソフトボール会場を変更せよ。チビチリガマ集会は子供たちを政争に巻きこむものだ」とこの集会への露骨な介入をはかった。このような攻撃は集会の全参加者から糾弾を浴び、集会では怒りの抗議決議文が採択された。翌日二五日には、沖縄市の中頭教育会館において、同様の趣旨の「天皇の戦争・戦後責任を告発する集会・街頭行動」がもたれた。左派労働者が主導したこれらのたかいは、総評・県労協解散、全民労連化攻撃が激化するなかで、今後の沖縄労働運動と沖縄階級闘争の帰すうを決する位置をもつにちがいない。

またこのたたかいと連帶して、沖縄日雇労組、沖縄労共闘、沖縄解放共闘、青年実行委を中心とする「現場共闘」が、皇太子沖縄上陸阻止・日の丸国体粉碎を掲げて連続闘争をうちねいた。現場共闘の部隊は二三日夜、那覇市緑ヶ丘公園での総決起集会と市内デモを貫徹し、二四日には糸満市で皇太子摩文仁蹊りん阻止闘争に決起し、二五日には沖縄市で皇太子国体出席阻止闘争と市内デモをおこなった。

われわれは日帝の沖縄支配の強化と正面からたたかいたいぬいた一〇月闘争の成果を受けつき、沖縄に階級的労働運動とプロレタリア政治闘争を両輪とする階級闘争の陣形を建設し、沖縄と「本土」を貫く单一の階級闘争を組織するためにさらに奮闘しなければならない。



總評中央の動きと連動し、すでに全民労連参加を決定した総評傘下の単産は一〇月はじめ現在で、鉄鋼・私鉄・全金・全電通・全日通など一七単産、約一二〇万にのぼっている。他方、反対もしくは保留は、全国一般・全港湾・国労・新聞労連など一八単産、約五五万となっている。単産レベルでの流動の焦点は官公労の攻防、お

# の再建めざして 労組連合を



90年解散を決定した本年7月の総評大会

# 反共ナショナルセンター

新右派ナショナルセンター＝全労連の旗上げかもくろま  
れ、わが国の労働運動は歴史的な転機を迎えるようとしている。帝國主義的労働運動の大波が労働者大衆を飲みこもうとするなかで、にもかかわらずこれに対決しようとする部分は圧倒

的守勢に立たされている。この局面を攻勢に転じ、わが国の労働運動と階級闘争を階級的に再建していくために、われわれはたたかいの基本的方向をすべての先進的労働者、そしてやがて労働者になろうとする先進的学生諸君の前に提起する

# 本格的な再編期に

## 突入した学僅単編

ナショナルセンター＝労働四団体再編の動きがあわただしくなってきている。中立労連と同盟はともに全民労連発足前日の一月十九日に解散し、全民労連への組織がえをおこなうことをすでに決めた。

・全的統一」を決定し、清算・整理過程に入つた。ペリ事務所の開設、関西公認会計士事務所

務所の閉鎖、労働ニュースの廃刊など中央機構が急速に縮小され始めている。地方機構につい

ても、すでに兵庫、千葉、高知などで地評解散が大会提案され、一〇月の全国地域活動者大会

を最後の中央集会として地区労、地区評も縮小され始めるなど、整理が開始されている。外郭

団体に関しては、日本労働安全衛生センターなどの廃止、原水禁などへの補助金削減という事

態が進行している。

加を決定した結果、下の単産は一〇月はじめ現

反対もしくは保留は、全国一般、全港湾、国労

単産レベルでの流動の焦点は官公労の攻防、お

的守勢に立たされている。この局面を攻勢に転じ、わが国の労働運動と階級闘争を階級的に再建していくために、われわれはたたかいの基本的方向をすべての先進的労働者、そしてやがて労働者になろうとする先進的学生諸君の前に提起する。

を考えていたと思われる。しかし、これは総評会は自立である。日本では国労・日教組を中心とした「日共」を展望しつつ、日教組が民労連に加入できない労組、新左翼系労組を加えるというナショナルセンター・イメージで、労働情報、全国労組連との共闘を表明し、日共への働きかけを開始した。しかし岩井提案「全労連」構想は、単産集から始めよという現役の協会派幹部の抵抗のなかで先送りされた。この部分は全民労連不参加単産五五万、日教組六六万を中心にして総評の三分の一をおさえ、総評解散決議を阻止することを展望している。

これらが労連の力団体は、当該労連をもつてゐる

これが「総評」の解説か防衛か」というレベルの水準が、「総評」をめぐる攻

ルから、「いかなる労働運動をいかにして分裂させ発展させるべきか」に移っていること、また移さねばならないことを示している。

われわれはくり返しのべてきました。現在の労戦統一は、日帝ブルジョアジーと彼らの依頼を受けた労働貴族たちによる労働運動の産業報国会化攻撃であることを。総評運動そのもののなかに、今日の労戦統一を要求する原因があつたことを。したがつてプロレタリアートのかかげるスローガンは「総評を守れ」では必ず敗北するのであって、総評労働運動を総括し、日帝が産業報国会を要求する根拠そのものとたかいうる、國際主義を掲げた新しい階級的労働運動こそを創出しなければならないことを。

われわれがいまなすべきことは、九〇年以降の階級的労働運動をたたかいするために、九〇年総評解散までをその準備戦としてたたかいくことである。そして敵の帝国主義的労戦統一攻撃に抗し、左からの分裂運動を組織しなくことである。

☆

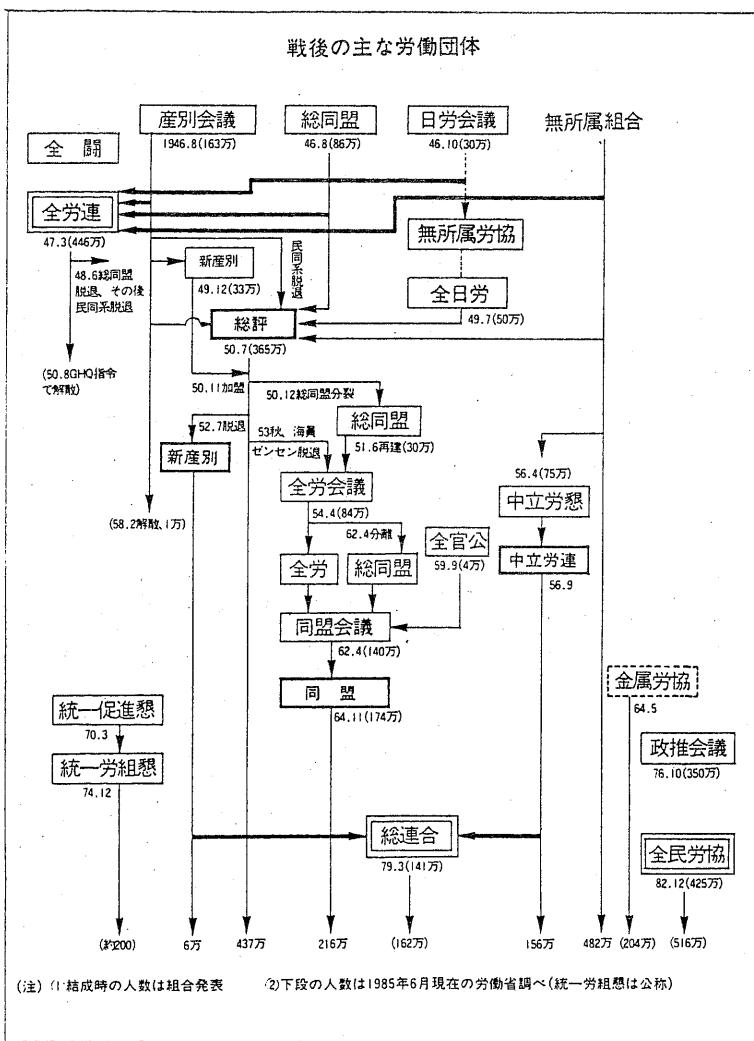
## 総評運動をどのよ うに総括すべきか

全民労連の発足が近づき、総評の崩壊は誰の目にも明らかになってきている。しかし一部の人々は、戦闘的総評が同盟などの産業報国会路線に敗北したと事態をとらえ、総評再建の主張にいまだ固執しつづけている。そういう見解はまったく誤っている。はつきりさせねばならないことは、今日までの総評運動の根本的性格、すなわち戦闘的経済主義が総評内部に産業報国会路線を育成し、同盟との合流の条件をつくりだし、全民労連そのものを生みだしてきたのだという事実である。

総評労働運動は多くの継承すべき経験や成果を残した。われわれは総評運動のいくつもの長所を保持したいと願う。しかし、だからといって総評の再建を、先進的労働者が今日掲げるべき第一のたたかいの旗印として提起してよいわけではない。総評再建論の誤りを明らかにするためにも、先進的活動家のなかに総評運動の階級的・階級的労働運動再建の進路を明らかにするためにも、先進的活動家のなかに総評運動の階級的な総括見地を確立することはきわめて重要である。

### ○総評の経済主義

総評の客観的発生根拠は、四九年中國革命の成立、朝鮮戦争の危機の切迫というアジアの革命的な危機の接近にさいしてのGHQのアメリカ



だが誕生した総評は、米帝や日本支配層の意図に反し、「ニワトリからアヒルへの転換」といわれる日本型戦闘的労働組合主義に成長した。第二次大戦における悲惨な敗戦共通原体験は、世界にもまれな総評の「平和主義組合政治闘争」を生みだし、朝鮮特需とそれ以後の日本資本主義の高度経済成長は、労働力の絶対的不足をもたらして総評運動が高賃金を毎年獲得する条件をつくった。「ニワトリからアヒルへ」の変質は、日本資本主義の高度成長、日本帝国主義の復興にもとづく戦闘的経済主義の形成であつた。

### ○成立基盤の消滅

かつての総評の戦闘的経済主義、組合主義的政治闘争はなぜ崩壊したのか、それは何によりかえられねばならないのか。

まず総評の戦闘的経済闘争を成立させていた基盤の喪失についてみておこう。戦後日本資本主義の生産力の崩壊と、その復興の最初の時期に総評は成立した。日本資本主義の復興は六〇年代を通じて高度経済成長とし得なされ、これは国内労働力の不足を慢性化させた。六〇年代中ごろを画期として日本資本主義は帝国主義へと発展していった。七三年の石

あった。

総評の運動の基本的特徴は次のものとしてとらえられる。①その結集目的は反戦平和・民主主義と高賃金の要求にあり、②その基本組織形態は企業内労働組合と産業別労働組合の二重形態であり、③その主戦術は反戦平和・民主主義擁護を掲げた政治闘争と戦闘的経済闘争であった。

総評労働運動は、たしかに大衆の生きんがため食わんがための自然発生性に立脚した。しか

# 階級的労働運動 全国に地方



総評が左施回するなかでたたかわれた日産争議(1953年)

ところがいまはこうである。企業の破産はすなわち失職、失業者になることと同じである。ほぼ新しい職場など存在しない。だから「何とかして自分の働き口だけでも維持しよう。賃金が上がらなくても倒産・失業よりもまだましだ。自分たちだけでもいまの生活を守ろう」。すなわち、かつての総評労働組合の結集目的であつた「高賃金の獲得」は、いまや失業の恐怖からする「自己の経済的身分の保守」に変化した。

他方、六〇年代はじめから民間基幹産業で進みつつあった労働者構成の変化、すなわち企業内本工の減少と下請け・外注の増大、これを基礎とした企業内本工の少数化、保守化、そしてそれに乗っかった同盟の伸長、JCの伸長という事態が、この時期、いっきよに全産業に波及していく。

日本帝国主義は労働者大衆に矛盾を転嫁することで、石油危機の打撃からいち早く立ちなおり、世界市場への急速な乗りだしをおこない、その結果、貿易摩擦という先進帝国主義間の激しい競争が生みだされた。八〇年代はじめからの円高不況のなかで、日本のブルジョアジーは産業の構造的な転換を急速に開始した。そしてこれとともに大失業時代が幕を開けた。このような状況のなかで、労働者の意識にも大きな変化があらわれてきた。

かつてはこうであった。「もっと働いてやろう。そのかわりもっと賃金を上げる」。資本家はこういった。「金はだそう。そのかわりもっと生産に協力せよ」。金をだせない資本家に対してもこういった。「いやでも金はださせる。破産するならせよ。われわれには別の働き口がある。そこにはわれわれを受け入れる総評組合もちゃんとある」。

かつての総評労働組合の主戦術であった「ストライキ」は、いまや企業を守ることによって自己の生活を守るために「労資協調」に変化した。だから総評労働組合の組織形態もますます企業内労働組合、本工労働組合の様相を強めていくことになった。

次に総評政治闘争を成立させていた基盤の喪失についてみてみよう。

総評の力の源泉であり、世界的にも注目を集めた長所のひとつは、その反戦平和・民主主義闘争は労働者大衆と中間階級層の支持を受け、総評労働運動が拡大する大きな要因となつた。

しかしやがて六〇年代後半には、総評政治闘争は急速にその力を失つていった。それは戦後五年の春闘を最後にして春闘は以降連敗しつづけた。「たたかっても取れない」という事態が現出した。

一方で、六〇年代はじめから民間基幹産業で進みつつあった労働者構成の変化、すなわち企業内本工の減少と下請け・外注の増大、これを基礎とした企業内本工の少数化、保守化、そしてそれに乗っかった同盟の伸長、JCの伸長といふ事態が、この時期、いきよに全産業に波及していく。

## ○継承すべき遺産

総評は崩壊した。われわれはその根拠を明確にすることも、総評労働運動が残した長所を正しく継承する義務がある。何を継承すべきなのか。

われわれが総評労働運動から継承すべき遺産の第一は、経済闘争と政治闘争の結合である。たしかに総評の後期には労働組合の任務を経済闘争に限定し、「経済闘争から政治闘争を鏡く分離する」経済主義が総評を支配した。しかし総評の地域共闘には二つの要素があった。一

つは主要都市における大労組を主力とする地域共闘であった。それは全国的な政治カンパニー、

そのハゲモニーである大労組は、結局は単産に主力をおいており、地域共闘は労組間共闘の限界を突破することができなかつた。それは大労組にとっては第一義的なものであつた。

しかし総評の地域共闘には第二の要素があつた。小労組を中心とした地域共闘である。そこでは日常的なたがいの労働組合の支援・協力といふ事態の結果、社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

敗北する。だから労働組合運動には、労働者階級の階級的利益を代表する政治要求と政治闘争が同時に必要である。われわれもまたみずから領導するために、このような政治闘争の組織化をすえづければならない。このときわれわれは決してゼロから出発しなくともよい。広く深く総評労働運動が形成してきた労働者政治決起の遺産が、必ず労働者大衆自身の体内に残されているからである。

総評労働運動から継承すべき遺産の第一は、地域共闘の経験である。

## 労組連合をつくれ

総評の地域共闘には二つの要素があった。一つは主要都市における大労組を主力とする地域共闘であった。それは全国的な政治カンパニー、

そのハゲモニーである大労組は、結局は単産に主力をおいており、地域共闘は労組間共闘の限界を突破することができなかつた。それは大労組にとっては第一義的なものであつた。

しかし総評の地域共闘には第二の要素があつた。小労組を中心とした地域共闘である。そこでは日常的なたがいの労働組合の支援・協力といふ事態の結果、社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

敗北する。だから労働組合運動には、労働者階級の階級的利益を代表する政治要求と政治闘争が同時に必要である。われわれもまたみずから領導するために、このような政治闘争の組織化をすえづければならない。このときわれわれは決してゼロから出発しなくともよい。広く深く総評労働運動が形成してきた労働者政治決起の遺産が、必ず労働者大衆自身の体内に残されているからである。

総評の地域共闘には二つの要素があった。一つは主要都市における大労組を主力とする地域共闘であった。それは全国的な政治カンパニー、

そのハゲモニーである大労組は、結局は単産に主力をおいており、地域共闘は労組間共闘の限界を突破することができなかつた。それは大労組にとっては第一義的なものであつた。

しかし総評の地域共闘には第二の要素があつた。小労組を中心とした地域共闘である。そこでは日常的なたがいの労働組合の支援・協力といふ事態の結果、社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

敗北する。だから労働組合運動には、労働者階級の階級的利益を代表する政治要求と政治闘争が同時に必要である。われわれもまたみずから領導するために、このような政治闘争の組織化をすえづければならない。このときわれわれは決してゼロから出発しなくともよい。広く深く総評労働運動が形成してきた労働者政治決起の遺産が、必ず労働者大衆自身の体内に残されているからである。

総評の地域共闘には二つの要素があった。一つは主要都市における大労組を主力とする地域共闘であった。それは全国的な政治カンパニー、

そのハゲモニーである大労組は、結局は単産に主力をおいており、地域共闘は労組間共闘の限界を突破することができなかつた。それは大労組にとっては第一義的なものであつた。

しかし総評の地域共闘には第二の要素があつた。小労組を中心とした地域共闘である。そこでは日常的なたがいの労働組合の支援・協力といふ事態の結果、社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

これは総評と同じ国民共通原体験にしがみつく社共にもまったく同じようにあらわれた。社共の政治闘争力が大幅に低下し、大衆の圧力により形成された社共共闘が崩壊したのも同様の原因であった。社共と総評は共通して国民の階級的・政治的分化に対応しえず、労働者政治要求と労働者政治闘争の側から見捨てられたのである。六〇年代後半のベトナム反戦闘争の高揚が、社共・総評のリードとは無縁なところに存在したものこの事態の結果であつた。

## ◎依拠すべき大衆

しなければならないのか、新しくつくられるべき労働組合運動はどのようなものでなければならないか。この点について次に提起したい。

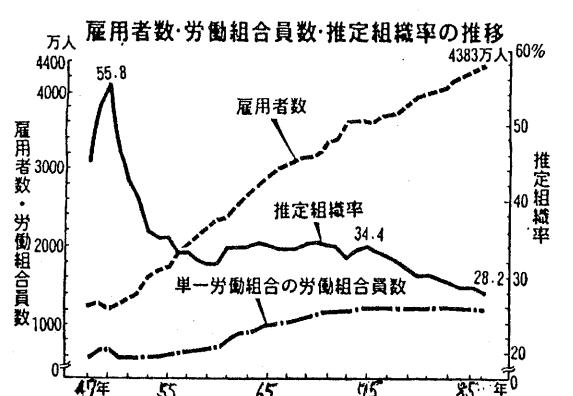
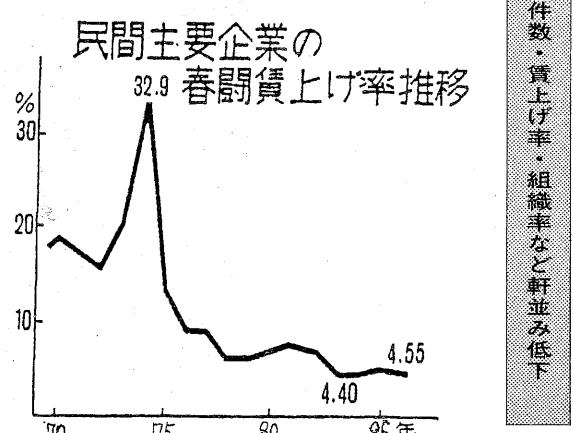
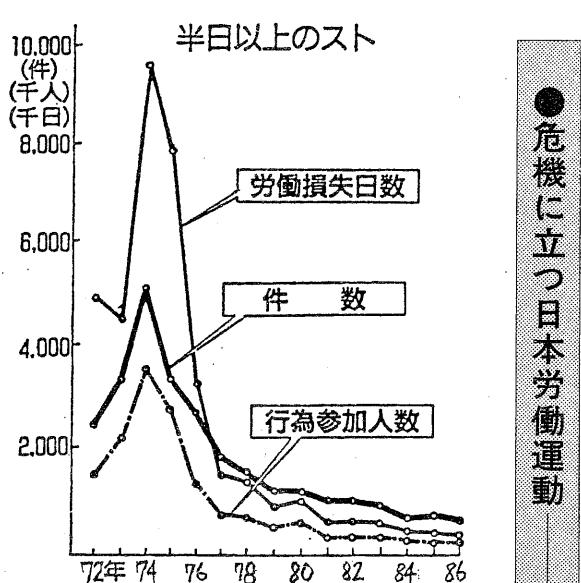
われわれはどのような大衆に依拠しなければならないのか。  
今日までわが国の労働者は、大資本のもとでの大企業本工労働者層と、大資本に従属する多数の中小・零細企業労働者層、そしてパートを含む労働予備軍に分断されてきた。総評の主力は大企業本工労働者層であり、全民労連への合流もこの上層労働者の保守意識に支えられたものであった。

ために、海外直接投資と、製造部門の海外移転を進めている。また鉄鋼、造船などの産業部門では、新興資本主義国の追い上げに直面し、資本の引き上げ、スクランプ化が進行している。総じて世にいわれる経済空洞化——製造業の縮小と第三次産業の拡大が急速に進んでいる。しかも我が国の労働者にこのような影響を及ぼす

すなわち、①本工労働者の労働貴族化と保守化の進行、②労働予備軍の増大、男性労働力のパート化の進行、③年功序列制、終身雇用制からはずれた下層労働者の増大、などがそれである。総じてわが国の労働者は上層、下層の二つにますます分断されていくのである。

上層労働者自身も労働強化、低賃金攻撃にさ

●危機に立つ日本労働運動



主要団体名	労組員数	対前年増減数	
		増	減
運輸労連	196	-	-22
運輸労連	210	-	-1
運輸労連	114	-	+1
運輸労連	25	-	-1
運輸労連	16	-	+1
運輸労連	57	-	-1
運輸労連	41	-	+1
運輸労連	254	-	+1
運輸労連	663	-	+1
運輸労連	47	-	+1
運輸労連	36	-	+1
運輸労連	143	-	+1
運輸労連	313	-	+1
運輸労連	138	-	+1
運輸労連	39	-	+1
運輸労連	155	-	+1
運輸労連	117	-	+1
運輸労連	44	-	+1
運輸労連	67	-	+1
運輸労連	161	-	+1
運輸労連	32	-	+1
運輸労連	168	-	+1
運輸労連	30	-	+1
運輸労連	36	-	+1
運輸労連	36	-	+1
運輸労連	498	-	+5
運輸労連	289	-	-24
運輸労連	133	-	-53
運輸労連	101	-	-99
運輸労連	217	-	-1
運輸労連	107	-	-1
運輸労連	157	-	-1
運輸労連	42	-	-1
運輸労連	118	-	-1
運輸労連	66	-	-1
運輸労連	30	-	-1
運輸労連	124	-	-1
運輸労連	89	-	-1
運輸労連	11	-	-0
運輸労連	10	-	-0
運輸労連	33	-	-2
運輸労連	655	+22	-
運輸労連	368	+17	-
運輸労連	42	-1	-
運輸労連	23	-1	-
運輸労連	385	+15	-
運輸労連	149	-	-7
運輸労連	87	-	-34
運輸労連	63	-	-0
運輸労連	38	-	-3
運輸労連	10	-	-1
運輸労連	31	-	-1
運輸労連	27	-	-1
運輸労連	43	-	-1
運輸労連	124	-	-1
運輸労連	689	-	-1
運輸労連	50	-	-1
運輸労連	34	-	-1
運輸労連	35	-	-1
運輸労連	32	-	-1
運輸労連	215	-	-2
運輸労連	5,164	-	+39
運輸労連	2,063	-	+27
運輸労連	654	-	-0

## ◎労組連合の任務

新しく生みだされる失業者・半失業者群、明日をも知れぬ下層の貢労者群、これらは日々増大し、支配層にとつても根底的な不安定要素になつていくだろう。彼ら下層労働者たちは、やがて以前のような高度経済成長の内側に自分たちがふたたび入れるなどと信じなくなるだろう。彼らは今までどおりには生活できない自分自身を発見する。不満と抗議が自然発生する。

われわれはわが国の階級的労働運動の再建の  
おいたわが国に、大きな分裂が誰の目にもあ  
れい隠すことができないものとしてあらわれる  
ようになる。

ために、この層の労働者の生きがため食わん  
がための自然発生性を、階級闘争として目的意識的に領導する活動を強化せねばならない。  
われわれは歴史の教訓をしつかりと踏まえねばよ。」

はたがたれいじゆうじでとおもひきてしらべくめた  
つた下層労働者の不満と現状変革の希望を組織  
しようとする者は、ひとりわれわれだけではな  
い。ファシズムがこれを組織しようとし、かつ

スト件数・質上げ率・組織率など軒並み低下

Year	Migration Rate
1982	4.40
1986	4.55

The graph shows a sharp decline in foreign debt repayment from 1976 to 1978, followed by a slight increase in 1980.

Year	Debt Repayment (Estimated)
1976	76
1977	78
1978	80
1979	春闢債上
1980	9

A line graph titled '民間' (Civilian) showing the percentage over time. The y-axis is labeled '%' and ranges from 0 to 30. The x-axis shows years 72 and 74. The data points are approximately as follows:

Year	Percentage (%)
1972	18
1973	16
1974	32

通自勞勞通關野林>關盟連盟連通關野政勞譽盟>學連金>連別地  
曰全曰共同勞同勞機古郡同管七發勞學

痛恨の事実として組織してきたことを忘れてはならない。イタリアにあっても、ドイツにあっても、日本においても、ファシズムが労働者を

組織したという歴史的事実を決して忘れてはならない。ファシズムの勝利は、歴史的任務に敗北したプロレタリアートとその党への懲罰なのである。われわれは生みだされるぼう大な下層労働者にしつかりと立脚しなければならない。

そしてまたたく同じように全民労連のもとで統制され、支配される労働者層にも強力に働きかけ、彼らを階級闘争の側に奪い返す努力を開始しなければならない。

## ◎労組連合の任務

なければならぬのか。

労働組合運動は労働者政治闘争の発展を促進させた。労働組合運動は、労働者階級の政治的意識の高揚と、労働者階級の組織化と強化によって、労働者階級の政治的影響力を増大させた。労働組合運動は、労働者階級の政治的影響力を増大させた。

現在われわれに問われてゐる階級的労働運動の再建もまたそういうものでなければならぬ。社会に代わる労働者階級の眞の前衛党建設と無縁に労働運動の再建はありえない。また何より

## 火 焰

時代にあって、経済闘争と政治闘争の結合の重要性は決定的である。国際主義、とりわけ被抑圧民族の反帝民族解放・社会主義闘争に対するわが労働運動の無償の連帯を組織することはきわめて重要である。

この点を踏まえてわれわれは、すべての地方に「地方労組連合」を建設することが今日の焦眉の課題であることを訴える。

それはたんなる労組間交流や単組間共闘にとどまるものではならない。また古い総評時代の地区評、地区労の再版であつては、眞に労組を必要とする大衆に力を与えるものになりえない。

建設すべき労組連合はまず第一に、強力な中央執行部をもち、連合規約をもち、連合財源をもち、連合中央に直属する活動家養成機関とオルグ団および活動家集団をもつ連合統一体として建設されなければ、今日の要請に応える組織になりえない。

第二に、建設すべき労組連合は、労働者のもつとも基礎的な要求を組織し、自己が労働者階級の一員であることを自覚させていくこと、すなわち「第一次の階級形成」にその重要な目的の一つをおかなければならぬ。

大衆の生きんがため食わんがための一つひとつの闘争の、勝利と敗北を通して、自己が労働者階級という賃金奴隸であること、敵がブルジョアジーとその政府であることを学び、労働者には団結と組織以外に武器のないことを、みずからが解放されるには資本主義とその国家を打倒して政治権力を獲得する以外にないことを、くり返しくり返しさし示すことこそが、今日の労働組合運動には必要なのである。

第三に、だからこそ建設すべき労組連合は、現実の労働者大衆の現に存在する生きんがため食わんがための要求にしっかりと立脚しなければならない。あらゆる左翼小児病を排除し、労働組合をあたかも革命の組織であるかのように錯覚する赤色労働組合主義を排除しなければならない。労働組合は労働者階級の第一次の団結体であつてこそ、階級形成のもつとも基礎的な、もつとも大衆的な運動体たりえるのである。

第四に、しかし建設すべき労組連合の運動は、賃金闘争を中心とする雇主との闘争を基礎としつつも、これのみにその領域を限定すべきではない。

失業者のための、社会福祉のための、権利のための、反差別のための運動、行政闘争や、地域労働者のための文化運動も、また生協運動、購買運動さえみずから運動とする見地に立たねばならない。現代にあっては労働者の生活はますます企業外に広がり、労働組合はその守備範囲を企業外の労働者生活にまで拡大してはじめて大衆の要求の全体性をつかむことができる。新しい運動は地域に存在する民主主義諸運動、諸市民運動体への階級的視点をも

## 労働者階級の国際連帯闘争を強化しよう！

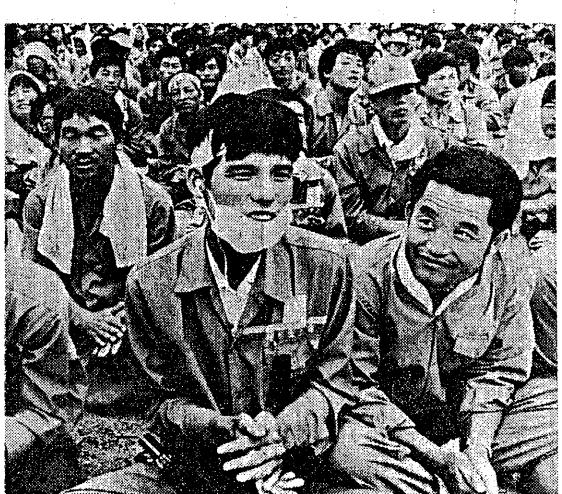
っての共闘から始まるだろう。しかし当面より重要なことは、これらの諸運動がみずから労働組合運動にとって必要不可欠であるといふ強い認識を、労組活動家のなかに強力に植えつけられることである。

第五に、建設すべき労組連合は、その内部に「地域一般合同労組」を新しく設置する必要がある。

労組連合は全体としては、いわゆるゼネラルユニオンや個人加盟組織である必要はない。現在さまざまな人たちが個人加盟の組織づくりを提案しているが、その多くは企業内組合の企業主義に対する批判や、また誓約的集団として労働組合をつくりたいという欲求にもとづいておこなわれている。しかし、われわれは労働組合の本性からして、労組員大衆を何らかの誓約でしばるとも思わなければ、しばりたいとも考へえない。意味のある誓約は、階級闘争とその路線、その組織への誓約であり、労働組合にとってはただその指導部と活動家層が、自己犠牲をもって労働運動の「護民官」たる誓約を創出するのである。

またわが国にあっては、厳として企業内労組を生みだす根拠が依然根強く存在している。ほこり始めたとはいえ、労働者の観念のなかにも、社会的にも、企業内労組を生みだす根拠、年功序列型賃金と終身雇用制はいまだ根を張つて存在している。企業別労組をただちに解体することはできない。建設すべき労組連合もその多くが企業別労組によって構成されるだろう。これは大きな問題ではない。

重要なことはわれわれの労組連合は、単組を形成しない個人の加盟店、小人数の職場の労働者、そして何よりも失業・半失業労働者の加入の要請に直面するだろうということである。新しい労働運動は積極的にこれらの企業別労組形態の枠外の労働者を組織すべきである。個人加盟を認める、地域に開かれた、職種や、就業・失業を問わない合同労組が準備されねばならぬ



(上)韓国現代重工業前で座りこむ労働者(9月4日)  
(下)ピケをはるフィリピンの製靴労働者(10月12日)

ない。この地域一般合同労組は、労組連合中央に直属し、労組連合内各単産活動家の二重加盟と、労組連合傘下の全労組員による財政援助が規約によって保障される必要がある。

第六に、そして最後に建設すべき労組連合は、政治闘争の組織化をみずから重要な課題に定めなければならぬ。

これについてはすでに何度も述べてきた。このさい重要なことは、あらゆる暴露、宣伝・煽動を全世界のプロレタリアートの共通の利益に立脚して組織すること、あらゆる政治要求を全世界のプロレタリアートの共通の利益に立脚して組織することである。日本帝国主義との政治闘争は大衆的政治闘争であるとともに、一方では厳格に労働者階級の利益を主張するものでなければならない。

われわれはみずから労働組合指導において、時々の政治闘争に大衆を動員するだけでなく、日常の政治宣伝・政治暴露・政治煽動を組織し、同時に何よりも活動家の政治教育を重視してこれを強化していかねばならない。

階級的労働運動を再建するたたかいは、日本帝国主義と正面から対決する階級闘争の陣形を建設するために不可欠の事業である。全民労連結成粉碎のたたかいを階級的労働運動の再建と結びつけてたたかいぬこう！

☆

☆

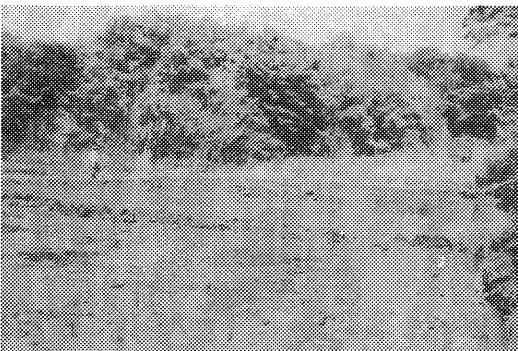
☆

六四七億円というのである。しかし公団がいかに増額要求しようとも、二期用地内には八戸の反対同盟農家が存在し、二三一ヘクタールの農地が存在している。八七年度予算の消化

C滑走路予定地の横堀自主耕作地をかこむ有刺鉄線(6月)

昨秋、二期工事本格着工以来、三里塚は正念場を迎えていた。C滑走路、B滑走路の建設のための造成工事が開始され、とりわけC滑走路予定地内の反対同盟農民への攻撃が激しくなっている。今年の五月には空港公団は、C滑走路予定地内の自主耕作地約三ヘクタールの土地を、有刺鉄線で封鎖するという暴挙をおこなった。さらには熱田氏の水田に対して、鉄筋や空き罐を投げこみ、ついには碎石、山砂を投入するという徹底した自主耕作地破壊攻撃をかけてきたのである。

このような用地内農家と農地に対する暴力的なたたきだし攻撃をおこないつつ、日帝・空港公団は、八月二六日、八八年度予算要求を提出した。それは八七年度を一%上回る六四七億円というのである。しかし公団がいかに増額要求しようとも、二期用地内には八戸の反対同盟農家が存在し、二三一ヘクタールの農地が



11・8

## 三里塚現地闘争へ！

状況は、七月末段階でわずか一〇%にすぎず、今回の予算要求は、まったく彼らのあせりを示すものである。

今回の予算要求の内容は、①旅客取り扱い施設の改良整備（九六億）、②構内道路、駐車場の整備（八一億）、③エプロンなど基本施設の整備（二三三億）、④給油施設の整備（二七億）、⑤施設管理など（七億）、⑥民家の防音工事、移転補償

激化する帝国主義間対立のなかで、全世界に新植民地主義支配を拡大し、動隊の暴力と既成事実の重圧による反対派つぶしの攻撃をかけてきていた。

強化することによってしか延命できる。

問題提起に立った一〇月集会実行委員会の渡辺勉氏は、「今日の労働運動はどう考えるか。いまの社会に月を闘う労働者実行委員会」の主催のもとでおこなわれた。(二二〇余名)のたたかう労働者が国労会館に結集し、集会は戦闘的な雰囲気のなかで開始された。

## 安保・訪沖と闘う 労働者集会に220人

六月にひきつづく成果

9・29 東京

# 一期工事阻止。軍事空港粉碎に決起せよ

ない日本帝国主義にとって、三里塚空港は軍事空港として必要不可欠である。このかんのペルシャ湾での航路防衛を掲げた自衛隊の海外派兵策動のなかで、四〇〇〇メートル滑走路をもつ三里塚空港の戦略的位置が大きく浮かびあがってきている。

日本帝国主義の全体重をかけた三里塚軍事空港建設の攻撃に対し、いまこそプロレタリア階級闘争の一翼としてのたたかいが求められている。

三里塚闘争を農地と農業の防衛にむけて空港本体工事に着手しようとする野望をたくましくしている。

このように、日帝・公団は、「用地内農家との話し合いをつくす」というポーズすら完全に投げ捨てて、機動隊の暴力と既成事実の重圧による反対派つぶしの攻撃をかけてきていた。

反対同盟農民とともに、二期阻止、軍事空港粉碎の政治要求を鮮明に掲げ、権力・機動隊の重包囲網を突破しよう。

一一・八三里塚現地闘争に決起し、一月連続闘争への決起を大きな拍手で確認し、集会は圧倒的勝利のうちに終了した。

の決意が表明された。最後に、天皇総評と総評政治闘争の崩壊が、労働者大衆の広範な政治決起の場を奪つているなかで、六月闘争に引きづく九・二九集会の勝利は、決定的に重要である。この成功を踏まえ、今秋全民労連結成粉碎を担いぬき、首都における階級的労働運動の陣形建設の前進を実現しなければならない。

冒頭、激動する韓国情勢と韓国労働者への国際連帯が、日韓民衆連帯首都闘争連絡会議から訴えられた。天皇訪冲阻止寒からは、訪冲阻止にむけた連続闘争への決起の要請がおこなわれた。また那覇市職の労働者から送られてきた訪冲反対のメッセージが、満場の拍手で確認された。

諸団体から、それぞれの職場・地域でのたたかいの報告と、今秋闘争へ

